

## 老年看護学におけるオムツ着用体験学習の効果

板橋和子

東京医科大学看護専門学校

【要旨】 老年看護学Ⅱの高齢者の排泄に関連した授業の一環としてオムツ着用体験を行っており、本稿は、体験後のレポートから学生の学びをまとめた報告である。結論は以下の通りである。

1. オムツ着用体験によるさまざまな不快感や苦痛を感じることができ、援助される側の気持ちがわかった。
2. 援助される側の気持ちがわかったことで、さまざまな援助としての気づきができていた。
3. オムツ着用体験は患者の気持ちを考えるのに効果的であったとほとんどの学生は肯定的に受止めていた。

### I. はじめに

日本における高齢者人口19.5%、百歳以上の高齢者が2万5千人と著しく高齢者が増加し、高齢社会におけるさまざまな問題・課題があげられ対策が講じられている。その中で認知症・寝たきり・尿失禁は高齢者のQOLを阻害する3大課題といわれている。

尿失禁は直接生命を危険にさらすということはないが、身体面、精神・心理面、社会面への多大な影響をもたらすといわれている。高齢者の排尿障害は、老年病や薬物療法の影響によるものや老化により排泄行動が障害されることによる機能的尿失禁が多いことなど、いくつかの原因とタイプが重なっていることが特徴である。看護する際それらの要因を総合的に検討する必要があり、機能的尿失禁は介護によって作られる尿失禁といっても過言ではない。介護者に対しての排泄の知識・技術・そして態度の教育が重要である<sup>1)</sup>。

オムツ着用体験は老年看護学の授業においてよく用いられている学習内容である<sup>2)3)</sup>。

本校も平成9年よりオムツ着用体験をすることで、オムツに対して“高齢者は仕方ない”“介護の手がはぶける”などの誤った認識をもつことのないように、また、オムツをつけている人の気持ちが少しでも理解

できるように排泄に関連する授業の前に課題にしている。学習成果が見られているので報告する。

### II. 研究目的

オムツ着用を体験することでどのように感じ、学んだのか、目的とした「オムツを着用している人の気持ちに近づくことができる」が達成されているのかどうか学生が提出したレポートの内容分析から明らかにする。

### III. 本授業のプログラム

老年看護学Ⅱでは学習目標を「老年期にある人の健康障害時看護の基本を理解する」とし、学生には「老化や老年期の健康障害は個性性が著しいことをふまえ、個人の生活背景や自助能力を最大限活用し、廃用症候群の予防や疾病回復のための知識・技術・態度を身に付けると共に対象の生命の安全と生活を守る看護の価値、役割を学んで欲しい」というねがいのもとに講義を行っている。この科目では校内実習として「片麻痺のある人の移動・移送・歩行訓練」「オムツ交換」を実施する。

本授業は2年次前期「高齢者の排泄障害・泌尿器疾患に障害のある患者の看護」として泌尿器病棟師長に講義依頼をしている。主な内容は1. 下部尿路の解剖

と排尿機能の神経支配 2. 蓄尿と排尿のメカニズム (ここまでは1年次, 看護技術排泄の援助の想起) 3. 高齢者に多い排尿障害 4. 前立腺肥大症と看護 5. 排泄の援助である。排泄の援助の中で収尿器具・尿吸収用具の選択を尿失禁との関連で説明。大人のオムツについての説明もしてもらっている。その授業を受けて、校内実習を行うが、その前にI. 排泄介助のアセスメント II. オムツ適応の3原則 III. オムツの選択の仕方 IV. オムツの適切な当て方 V. オムツの弊害 VI. その他 (紙おむつの構造・費用・処理) について講義。その後、3人1組で事例に沿ってオムツ交換を体験する。患者役は陰部モデルを装着し、その上に紙オムツを着用する。紙おむつはオムツ着用体験と同じマジックテープ式L2枚。尿とりパット1枚。実施後Gwをし、① オムツ交換を受けた人の感想 ② オムツ交換時に配慮すること ③ オムツ交換を実施してみてもての感想を記載してもらう。

#### IV. 研究方法

##### 1. 対象

41回生おむつ着用体験した84名中50名。(84名の協力があつたが無作為に50名のレポート抽出)

##### 2. プロトコル

オムツ着用体験は、本授業を行う1ヶ月前に、「オムツを着用している人の気持ちを少しでも理解できる」ことを目的に課題としている。方法は、① オムツを着用後臥床し排尿する。そのまま2時間以上経過する。② 臥床しても尿が出ない場合、トイレでオムツに排尿する。臥床し2時間経過する。③ オムツに排尿できなかった人、したくない人は200~300mlの微温湯をオムツに入れ着用し臥床2時間経過する ④ 体験しない等学生に対する倫理的配慮として学生を選択としている。その後レポート提出。④を選択した人は体験したくない理由を記載する。体験の方法は老年看護の講義の中で主旨を説明し、自宅で体験するように説明した。学生に自分のサイズにあつたものを1枚(ユニチャームライフリーマジックテープのMかL) 配付した。

##### 3. 倫理的配慮

倫理的配慮として成績評価後レポート返却。本研究の目的と方法を口頭で説明し、協力をしてくれる学生のレポートを再度提出してもらった。さらにレポート内容は個人が特定されないことを説明した。また、オムツ着用体験の方法は学生を選択とした。

#### 4. 調査期間

平成17年5月~6月

#### 5. 分析方法

##### 1) レポートの内容分析

オムツ着用体験後に提出されたレポートの中で① 精神的側面 ② 身体的側面 ③ 社会的側面 ④ オムツ着用体験しての感想 ⑤ 援助としての気づきについて、感情・動作・状態を表現する単語、学んだことと解釈できる文の内容を記述単位とした。

##### 2) 授業評価から

老年看護学II授業終了時に「オムツ着用体験は患者の気持ちを考えて看護するのに効果的である」5段階評価 (とてもそう思う, そう思う, 普通, そう思わない, 全くそう思わない)

#### V. 結果

##### 1) 紙おむつ着用体験の実際

オムツの着用体験の実際は表1で示すような結果を呈した。①2時間以上19名。②はどうしても寝たままでは出ない。トイレでないと出ないという理由で②を選んで③は①②を試みただけで出なかったということである。2名はオムツに排尿するのは抵抗があるということであった。オムツ着用が10分という学生はいたがほとんどの学生が濡れたオムツを体感したことになる (表1)。

2) オムツ着用しての感想・学び・考えたこと (表2)  
感想・学び・考えたことを① 精神的側面 ② 身体的側面 ③ 社会的側面 ④ オムツ着用しての感じ方・

表1 オムツの体験学習の実際 N=50

方法/時間	2時間以上	1時間以内	30分~10分
①オムツ装着し臥床, 排尿, そのまま2時間以上経過する。	19	1	1
②トイレでオムツ装着, 排尿, その後排尿したオムツをつけたまま臥床し2時間以上経過する。	14	4	0
③オムツできなかった人, 200~300mlの微温湯をオムツに入れ装着, そのまま臥床し2時間以上経過する。	8	0	1
最初からオムツに排尿したくない, 200~300mlの微温湯をオムツに入れ装着, そのまま臥床し2時間以上経過する。	2	0	0

表2 オムツ装着体験しての感想・学び n=50

	感想・学びの内容	体験人数
精神	オムツをつけている姿を見られるのは恥ずかしい 羞恥心	23
	尊厳がそこなわれる 自尊心が傷つく	11
	オムツをつけることは屈辱的である気がした	4
	オムツをつけると失望感を感じた (悲観的・みじめ・なさけない)	7
	患者にとっても嫌悪感を感じることが学べた	1
	オムツをしているだけで自分が人より劣っているように感じた	1
	オムツはやる気を奪うものの一つ (行動の意欲がなくなる)	4
	動きたくない	2
	濡れた部分にあたると不快なので体を動かしたくなくなる	1
	臭うのではないかと心配だった	25
	オムツをつけているだけでストレスになる	13
	オムツをつけるだけで不快 違和感がある	8
	オムツをつけなければならないことを納得しなければならないのは辛い	1
	オムツを取ってすぐ風呂に入りたかった (シャワー) はいった	7
オムツを早くはずしたかった	4	
オムツ装着体験そのものがいやだった 辛かった	3	
オムツに排尿することは抵抗があった 拒否感	9	
身体	排尿しようとしたが尿が出そうで出なかった	31
	自分のどこかで寝たまま排尿してはいけないと抑制している	4
	おねしょみたいで自分がすごく悪いことをしているような感じがした	4
	排泄したものが皮膚につきとても不快だった	11
	排尿後すっきりしなかった (残尿感)	8
	オムツから尿が漏れそうで不安・恐ろしい	37
	背中にもで流れてきてしまいそうで不快だった	7
	オムツをつけると動きにくかった	2
	排尿後重くなったオムツをつけているのはかなり不快	15
	痒くなりそう・痒くなった	9
	皮膚がかぶれそうだった 湿疹 発赤	12
	オムツの中は湿っていて (濡れていて) 気持ち悪かった	17
	湿った部分が冷たくなり不快	8
	オムツをつけていると蒸れて不快	13
おなかの周りが汗ばんできた	4	
オムツに排尿すると生暖かく臀部に伝っていき気持ち悪かった	11	
* 排尿後冷感や湿った感触は一切なかった	1	
社会的側面	誰にも会いたくなかった	1
	社会参加の意欲低下	1
おむつ着用しての感じ方・考えたこと・学んだこと	オムツをつけていると歩きにくい	11
	ゴワゴワしていて臀部になじみにくい	16
	大腿の付け根の部分がチクチクする 股関節に違和感	7
	オムツのつけ方がわからずあたふたした	2
	オムツの大きさに驚いたが装着すると安心感があった	1
	オムツをつけている人の気持ちがわかった (辛さ・苦痛・不快感・大変さ)	17
	毎日オムツをつけている患者のことを考えたら辛くなった	3
	オムツをして普通に生活するのは苦痛と感じた	1
	オムツを装着したくない高齢者の気持ちがよくわかった	1
	オムツをつけるときの受止め方, 臥床したまま排尿する時の気持ちを学べた	1
	患者さんの気持ちをよく理解し看護をしたいと思った	1
	今回体験した不快感を忘れずに気づける看護師になりたいと思った	6
あの不快感は体験してみないとわからない 予想以上のものであった	1	

おむつ着用しての感じ方・考えたこと・学んだこと	オムツをしている高齢者にどのような援助が必要か考える機会になった	2
	患者さまの気持ちを考慮し, 精神的苦痛をできるだけ少なくするために努めるべきだ	1
	おとしよりの介護への関心が高まった	1
	オムツをせざるを得ない患者さまにどのようなケアをしてあげたらいいのか今の私には知識不足なのでもっときちんと考えていきたい	1
	安易な看護師の判断でオムツを使用してはいけないと感じた	1
	排尿困難になった場合オムツをすることが便利で一番よい方法だと思っていたが介護者の立場からの発想ということがわかった	3
	大人のオムツは想像以上に大きくゴミの量が増える	1
	慣れてしまえばオムツを装着したまま臥床しているのは苦にならなかった	4
	*オムツの中をさわってみると意外に水分は吸収されて臭いもしなかった	1
	*オムツは吸収力が高く安心感があった	3
	*オムツは想像以上に快適であった(サラサラ)	3
援助としての気づき	トイレが終わった後すぐ水を流すようにオムツを取り替えるべきだ	1
	速やかに交換することが必要	18
	マメに交換してあげることが必要	5
	不必要な露出は避ける	2
	周囲に気づかれないようにプライバシーへの配慮	5
	おむつ交換をするとき冷感を少なくするために室温に注意が必要	1
	こまめな換気などへの配慮 排泄しやすい環境づくり	4
	陰部洗浄・陰部の清拭を入念にしてあげたい	16
	個人の排尿パターンの観察をし, 早めに気付いてあげる	13
	かぶれなどないかよく観察する	3
	感染の危険を感じた	6
	不潔のままにしておくと褥瘡になってしまう可能性があると感じた	1
	すぐに訴えられるような関係づくり 頼みやすい雰囲気	5
	声かけの言葉や表情に気をつける	1
	対象のプライドを尊重した言動をとる配慮が必要	6
	その人の気持ちを傷つけずに看護することが大切	2
	オムツはかさばるので服装や身だしなみに充分配慮	1
なるべくトイレにいけるように援助したい	2	
安易にオムツという選択肢を考えるよりも, その人のADLの拡大をはかることが大切	1	
オムツは使用者のサイズに合ったものを選ぶ(隙間がなくぴったりするもの)	6	

考えたこと・学んだこと ⑤ 援助としての気づきの5項目に整理した。① 精神的側面は「臭うのではないかと心配だった」25, 「オムツをつけている姿をみられるのは恥ずかしい・羞恥心」23, 「オムツをつけることは尊厳が損なわれる・自尊心が傷つく・屈辱的・失望感・悲観的・惨め・情けない・嫌悪感・劣っている感じ」は24, 「オムツはやる気を奪う・行動意欲がなくなる・動きたくなくなる」7, 「オムツ着用体験そのものが嫌だった・辛かった・抵抗があった」12, 「オムツをつけているだけでストレス・つけなければならないとことを納得しなければならぬのは辛い, 早くはずしたい・すぐシャワーを浴びたい・入浴したい」33であった。身体的側面では「排尿しようとしたが出なかった」31, 「オムツから尿が漏れそうで不安だった」37, 身体的不快感として「排泄したものが皮膚につく・尿が生

暖かく臀部に伝っていく・尿が背中に回りそうだ・痒くなる・かぶれて湿疹, 発赤が出そう・蒸れる・湿った部分が冷える・おなかの周りが汗ばんだ・排尿後スッキリしない」137, 「排尿後の重くなったオムツをつけているのはかなり不快」15であった。③ 社会的側面は「誰にも合いたくない・社会参加意欲の低下」2, ④ オムツ着用しての感じ方では「ゴワゴワして臀部に馴染みにくい・股関節部に違和感」23, 考えたこと学んだこととして「オムツをつけている人の気持ち(大変さ・苦痛・辛さ・不快感)がわかった」17, 「オムツを着用したくない高齢者の気持ちがわかった, オムツを受ける時の受けとめ方, 臥床したまま排尿する時の気持ちを学べた, オムツをしている高齢者にどのような援助が必要か考える機会になった, 不快感は体験してみないとわからない, 想像以上のものであった, 不

快感を忘れずに気づける看護師になりたい, 排尿困難になった場合オムツをすることが便利で一番よい方法だと思っていたが介護者の立場からの発想だとわかった, 安易な看護師の判断でオムツ使用してはいけないと感じた」等の学びが表現されていた。

⑤ 援助としての気づきでは「速やかに交換してあげるべきだ・ママに交換してあげることが必要」24. 「陰部洗浄・陰部の清拭を入念にしてあげたい」16. 「個人の排泄パターンの観察をし, 早めに気づいてあげたい, すぐに訴えられるような関係作り, 頼みやすい雰囲気, 気もちを傷つけない, プライドを尊重した言動をとる」「安易にオムツという選択肢を考えるよりも, その人のADLの拡大を図ることが大切, なるべくトイレにいけるように援助したい」等51であった。

### 3) 授業評価から

クラス全員84名の「オムツ着用体験は患者の気もちを考えて看護するのに効果的であった」に対してとてもそう思う50名, そう思う29名, 普通4名, そう思わない1名, 全くそう思わない0名であった(図1)。

## V. 考 察

高齢者が介護されるようになったときに一番気にするのが排泄の介助である<sup>4)</sup>。

高齢者でなくとも「自分の排泄の始末は他人の世話にはなりたくない」という思いが強い。同時に家族にとっても「下の世話」の大変さが介護上の問題になる。排泄の問題は高齢者の自立と尊厳に深く関わる重大な問題である。

今回, 学生達はオムツ着用体験をすることで精神的・身体的不快感を強く認識し, オムツを着用する高齢者の気もちを考慮することが出来ている。「トイレでないと出ない」「オムツでは出なかった」や「オムツをつけている姿をみられるのは恥ずかしい」「オムツをつけることは尊厳が損なわれる・自尊心が

傷つく・屈辱的・失望感・悲観的・惨め・情けない・嫌悪感・劣っている感じ」「オムツ着用体験そのものが嫌だった・辛かった・抵抗があった」「オムツをつけているだけでストレス・つけなければならないとことを納得しなければならないのは辛い」等のさまざまな精神的苦痛を体感している。大井氏は「日本人の場合は, 排泄行為を“恥ずかしいこと”排泄物を“不浄・不潔なもの”といったとらえ方をする様に学習されてくる。そのためわが国では, 排泄は個室で人知れずひっそりとおこなうものという認識が一般的である。このように排泄行動は, きわめて個別的な要素をもっているため, 排泄行動や排泄の処理を他人に依存しなければならない状況に置かれた患者の心理苦痛を充分配慮する必要がある。」<sup>5)</sup> という。オムツ着用しなければならないこと, 排泄の処理を他人に依存しなければならない苦痛を感じ取れている。

また, 身体的不快感も強く感じており「排泄したものが皮膚につく・尿が生暖かく臀部に伝っていく・尿が背中に回りそう・痒くなる・かぶれて湿疹, 発赤が出そう・蒸れる・湿った部分が冷える・おなかの周りが汗ばんだ」「排尿後の重くなったオムツをつけているのはかなり不快」などオムツ着用を強いられた高齢者の不快・苦痛に共感できている。紙オムは最近開発が進み排泄尿後も皮膚はさらさらなどといわれているが, 体験した時期が5月～6月と蒸暑い時期なども関連し, 皮膚トラブルや不快感をさらに強く感じたものと思われる。オムツ着用しての感じ方「ゴワゴワして臀部に馴染みにくい・股関節部に違和感」や考えたこと学んだこととして「オムツをつけている人の気もち(大変さ・苦痛・辛さ・不快感)がわかった」「オムツを着用したくない高齢者の気もちがわかった, オムツを受ける時の受けとめ方, 臥床したまま排尿する時の気もちを学べた, オムツをしている高齢者にどのような援助が必要か考える機会になった, 不快感は体験してみないとわからない, 想像以上のものであった, 不快感を忘れずに気づける看護師になりたい, 排尿障害になった場合オムツをすることが便利で一番よい方法だと思っていたが介護者の立場からの発想だとわかった, 安易な看護師の判断でオムツ使用してはいけないと感じた」等の学びが表現されていた。高齢者の尿失禁は「年のせい」とされ, ケアの現場でも安易にオムツ着用が行われてきた傾向がある。学生達も高齢者が失禁している場合は, オムツをしたほうが衛生的でトイレに介助するより高齢者も介助者も楽

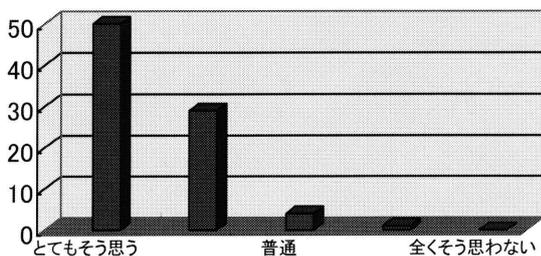


図1 体験学習の効果 n=84

であると安易に考えている者も多かったが体験学習することで間違いあることに気が付いている。認知症の祖母を介護している学生のレポートに「祖母は尿失禁を繰り返していたため母はオムツを用意した。オムツをしているのに祖母はトイレに行こうとする。私はいままで不思議に思っていた。オムツをしているのだからわざわざトイレに行かなくとも祖母にとっても介護するほうだって、お漏しをされるよりオムツを取り替えるほうが楽なのに・・・と、それは介護する側の勝手な思い込みで過ぎなかったことが今回のオムツ着用体験でわかった。不快な思いは想像することができても尿失禁とはいえ排尿の不快感は本人にしかわからないのだと思う。」と記載され、相手の立場にたって考えることの大切さを学んでいる。

また、援助としての皮膚トラブルや感染の危険にも気づき「速やかに交換してあげるべきだ・マメに交換してあげることが必要」「陰部洗浄・陰部の清拭を入念にしてあげたい」「個人の排泄パターンの観察をし、早めに気づいてあげたい、すぐに訴えられるような関係作り、頼みやすい雰囲気、気持ちを傷つけない、プライドを尊重した言動、陰部洗浄や清拭を入念にしてあげたいなど」「その人のADLの拡大を図ることが大切、なるべくトイレにいけるように援助したい」などケアに関しての多くの気づきも見られオムツ着用体験をすることでオムツに対しての認識の変化が見られている。

社会的側面としての気づきは多くはなかったが「臭うのではないかと心配だった」「誰にも会いたくなかった」「オムツはやる気を奪う・行動意欲がなくなる・動かたくなくなる」等はオムツ着用していることを知られたくない、気力がなくなり閉じこもりにつながることも数名は感じ取れている。高齢者にとってオムツは身体的・心理的・社会的にいろいろの影響を及ぼし、介護者の都合で安易にオムツを使用してはいけないということが分かり、オムツ着用体験の目的は達成されている。しかし、助川未枝保氏はオムツ百科の中で「高齢者はちょっと咳をしたら尿漏れをすることがあるといったことが不安を増したり自信喪失につながったり、外出を控えるようになっていたり、さらに家に閉じこもるようになってしまうこともあるといわれている。排泄介助においてオムツの果たす役割は、かなりの部分を占めるようになっていきます。以前は、尿意や便意があるのに介護の手間を減らすという主に介護側の都合で使用され、個人の尊厳を損なう介護

の象徴のような捉え方をされていたことは事実です。そのためにオムツはずしがブームになり、オムツが悪者になった時期がありました。しかし、現在はオムツの種類が豊富になったことに加えて、その使用方法が多様化してきたこともあり、高齢者自身が排泄できる範囲を拡大するための、高齢者のプライドを傷つけない一方法である、と考えられるようになっていきます<sup>6)</sup>といわれるようにと商品の開発も進みオムツ事情は変化し考え方も変化してきています。そのことは体験からは学べないことであるので、本人の意思を尊重し排泄介助のアセスメントをすることの重要性、オムツ適応の3原則、オムツの選択の仕方を強調、様々なオムツの種類を見せ、おむつの果たす役割について講義している。

オムツ着用体験は授業評価の結果からもわかるように患者の気持ちを考えるのに効果的であると、ほとんどの学生は肯定的に受止めている(表3)。理論的知識だけでは学ぶことの出来ない患者の気持ち、オムツをつけてみての不快感など直接体験したことにより共感的理解につながったのではないかと思う。澤田瑞也氏は「共感的理解を高めるためには、自分自身の感情体験を豊かにしていくこと、相手の気持ちを感じ取ることが重要とされており、それに類似の体験の想起が有効となる<sup>7)</sup>」といっている。

## VI. 結 論

1. オムツ着用体験によるさまざまな不快感や苦痛を感じることができ、援助される側の気持ちがわかった。
2. 援助される側の気持ちがわかったことで、さまざまな援助としての気づきができていた。
3. オムツ着用体験は患者の気持ちを考えるのに効果的であったとほとんどの学生は肯定的に受止めていた。

## VII. 終わりに・謝辞

オムツ着用体験はオムツ着用している高齢者の気持ちに共感でき、排泄介助時の態度やオムツ着用アセスメントをする際にもいかされるものと思われる。「オムツ着用体験そのものが嫌だった・辛かった・抵抗があった」と述べた学生達も、このような機会がないと自分からは絶対やらないと思う。やってみていろいろ感じる場所がありこのような課題がありよかったですと述べている。青年期のこの時期は、恥じらいや羞

恥心・自分への美意識が強い多感な時期でもある。以前、オムツへの排泄行為は自分が穢れるようで体験しないという学生がいた。体験学習で学べるものも多いが、このような青年期の心理も考慮し学習の機会を企画していきたい。

最後になりましたが、積極的にオムツ着用体験に参加し、体験レポートを提供してくれた学生達に心より感謝いたします。

### 参考文献

- 1) 奥野茂代, 大西和子. 老年看護学 II. 東京, ヌーベルヒロカワ, 2004.
- 2) 岩鶴早苗, 天津榮子他. 老人看護学における学内演習の効果の検討. 和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要, 3, 39-47, 2000.
- 3) 丁野みどり, 西川千歳. 老人看護学における学生の体験学習の成果. 神戸市立看護短期大学紀要, 15, 91-97, 1996.
- 4) コミュニティケア編集部編. “オムツの適切な選択とケアプラン”. ケアマネジャー訪問看護師ヘルパーのためのオムツ百科: 上手な利用で快適な生活を実現. 東京, 日本看護協会出版会, 8-9, 2004.
- 5) 石井八重子, 大竹芳子編著. 情意領域の看護技術. 日総研出版, 1995.
- 6) 助川未枝保, 吉川羊子他. オムツ百科. 日本看護協会出版会, 9, 2004.
- 7) 澤田瑞也著. “患者への共感的理解”. 看護のための教育学: 「知る」から「分かる」への教育. 東京, メヂカルフレンド社, 111-115, 1998.
- 8) 小島操子, 金川克子他編. 老年看護学. 第2版. 金原出版, 79, 1997.(標準看護学講座; 28)
- 9) 岡村菊夫. エイジングアンドヘルス「高齢者の尿失禁と QOL」: NO. 29, 2000.